

## 映画主題歌「祇園小唄」考

—承前—

大西 秀紀 (レコード収集家)

E-MAIL ban-jin@ares.eonet.ne.jp

## はじめに

筆者は『アート・リサーチ Vol.3』において、「映画主題歌「祇園小唄」考」<sup>(1)</sup>と題し、『祇園小唄』について、その歴史的背景や作品の特性、発表後の反響等についての考察を行った。その際、残念ながら紙数の都合で、類似曲の解題等を省略せざるを得なかった。その後未見であった資料の入手もあり、ここに改めて類似曲の解題を中心に、『祇園小唄』の受容状況について考察を進めたい。

## 1. 『祇園小唄』が示したキーワード

## 1-1. 歌詞

映画主題歌『祇園小唄』は昭和5年のビクター1月新譜として発売された。それは我が国レコード史上、京都を題材にした流行歌レコードで、初のヒット曲の誕生を意味すると同時に、作詞者長田幹彦による、京の唄のキーワードの提示でもあった。

『祇園小唄』の歌詞は、次の四節である。

月はおぼろに 東山  
霞む夜毎の かゞり火に  
夢もいざよふ 紅ざくら  
しのお思ひを 振袖に  
祇園恋しや だらりの帯よ

夏は河原の 夕涼み  
白い襟あし ほんぼりに  
かくす涙の 口紅も  
燃えて身を焼く 大文字

祇園恋しや だらりの帯よ

鴨の河原の 水やせて  
咽ぶ瀬音に 鐘の声  
枯れた柳に 秋風が  
泣くよ今宵も 夜もすがら  
祇園恋しや だらりの帯よ

雪はしとしと まる窓に  
つもる逢瀬の さしむかひ  
灯影つめたく 小夜ふけて  
もやい枕に 川千鳥  
祇園恋しや だらりの帯よ

(日本音楽著作権協会 (出) 許諾第0416515-401)

『祇園小唄』以前に、京都・祇園界隈の四季おりおりの風情を歌い込んだものとして、端唄『京の四季』がある。『祇園小唄』にもその影響は随所に見受けられるが、長田は舞妓を唄の主人公に据えることで、聴き手に与える視覚的イメージをより色鮮やかにし、さらに悲恋の境遇を匂わせることで、ドラマ性を加味することに成功した。高い完成度と親しみ易さを兼ね備えた『祇園小唄』の登場は、レコード業界に大きな刺激を与えたといえる。

## 1-2. 類似曲の登場

類似曲の数は、オリジナルの人気を計る尺度でもある。レコード各社の制作スタッフ達は、オリジナルから引き出したキーワードを元に、第二、第三の『祇園小唄』を作り出そうと試みた。すなわち「月」「桜」「篝火」「鴨川」「雪」といった言葉は元より、「祇園」「東山」などの地名は、「八

坂」「円山」「三条」「四条」「花見小路」へと広がりを見せ、「振袖」「だらりの帯」などの舞妓の装束については、「袂」「こっほり」「簪」にも目を向ける—というように、「祇園もの」の単語カードは、次々と追加されていった。そして作家達は、これらの言葉を再び組み立て直すことに腐心するのである。

オリジナルの『祇園小唄』に対し、曲名、歌詞、曲調が類似したもので管見に入ったものは、次の十種類である。

### 1-3. 解題

#### i. 『祇園小唄』、唄・葎町二三吉、コロムビア 25803、昭和5年4月発売

オリジナルの発売から三ヶ月後に、ビクターのライバルであるコロムビアから発売された同名異曲（裏面は『博多小唄』、唄・葎町二三吉）。作詞者不詳、杉山長谷夫の作曲。曲名のみならず、唄に同じ二三吉を起用しているところが注目される。前述の通り、オリジナルは昭和5年1月（厳密には昭和4年12月20日前後）発売であるが、話題になり出したのは、やはり映画『祇園小唄 絵日傘 第一話 舞ひの袖』が公開された昭和5年2月1日以降ではないだろうか。そうすると、このコロムビア盤は2ヶ月足らずの間に、企画・吹込み・製造・販売が行われたことになる。この短期間に見せたライバル他社の反応は、それだけオリジナルに対する反響の大きさを示すといえるだろう。

このコロムビア盤は四節の歌詞からなり、第一節は赤穂義士に思いを寄せる芸妓、第二節は幕末の勤王芸妓、第三節は祇園の舞妓、第四節は春の都をどりで出会い、冬の顔見世には丸髻で行く（秋に嫁いだの意）という京女の姿を唄っており、それぞれの節を「トコトンヤレ、トンヤレナ」という囃子詞で締めくくっている。

第一、二節を見ると、義士や勤王志士と祇園の関わりといった、オリジナルにはない視点が見られる。節末の「トコトンヤレ、トンヤレナ」も維

新時代のはやり唄「宮さん宮さん」から採ったものである。しかし第三節は「月もおぼろに 袂もおぼろ」で始まり、「夢か現か」「あの夜桜に」「簪もかすむ」といったフレーズの組み替えに終始しており、オリジナルを意識したことは明らかである。しかし長田の筆力の域には到底及んでいない。

#### ii. 『祇園小唄』、唄・祇園品千代、ショーワ722、昭和5年頃？発売

オリジナルの同名異曲。唄の品千代は祇園を名乗っているが、現段階では祇園甲部あるいは乙部に籍があったかは確認できていない。品千代はこれ以外にも、タカシマヤレコードなどに数曲吹込んでいるようだ。ショーワレコードは京都市伏見区のレコード会社、昭和レコード製作所のレーベルである。会社の設立時期は不明だが、手元のレコード番号501番から始まる同社の一枚刷り新譜目録に、「特別発売 奉祝歌 御大典節 番号680」とあることから、昭和2～3年の設立だろうか。

表面は四節の歌詞からなり、三味線伴奏の日本調の編曲。裏面は、メロディーは表面と同じだが、三節の歌詞からなるジャズバンド伴奏にアレンジされている。録音が不明瞭なため、非常に歌詞が聴き取りづらいが、花街祇園の夜の喧噪を中心に描いており、各節末を「そんなこと言うたかて 太平楽よ」という言葉で締めくくっている。

この曲は、曲名以外オリジナルの影響はさほど見受けられない。むしろ「テナモンヤ ないかないか 道頓堀よ」と唄う、昭和4年7月発売の大ヒット曲『浪花小唄』<sup>(2)</sup>に想を得ているように思われる。

#### iii. 『新作祇園小唄』、唄・岩田正／新橋才三、ショーワ7878、昭和5年頃？発売

品千代『祇園小唄』より少し後に、同じショーワレコードから発売された。表・裏それぞれ三節の歌詞からなるが、第一節の「京の四条の宵闇淡

しー」は共通している。またメロディーも表・裏それぞれ共通だが、表面は岩田正の唄でジャズバンドの伴奏、裏面は新橋才三の唄で三味線、囃子の伴奏である。前記ii. 同様、この盤も録音が不明瞭なため、非常に歌詞が聴き取りづらいが、「東山」「月」「だらり帯」「振袖」などオリジナル同様の言葉を繋ぎながら、舞妓の悲恋を唄っている。レーベルに作詞・作曲者の記載はないが、鳥取春陽の作か。<sup>(3)</sup>

#### iv. 『新祇園小唄』、唄・京極英子、ジャズバンド、タカシマヤ5011-A、発売時期不詳

奥田茂湖作詞、宇川隆三作曲。関西のマイナーレーベルであるタカシマヤレコードからの発売であるが、製造は特許レコードで、ボール紙を芯にした7インチ盤である。

曲名はオリジナルに類似しているが、メジャーのメロディーはオリジナルの日本調とは全く異なり、こちらはゆったりとしたテンポのジャズソングである。しかし三節の歌詞（レコードには三節目は収録されていない）は、「おぼろ夜月夜」「燃ゆる篝火」「鐘の声」といった言葉からなり、各節のさびの部分に「祇園恋しや だらりの帯よ」という、オリジナルと全く同じ詞章を使っている。

#### v. 『祇園新小唄』、唄・南地金龍、タイヘイ3050、昭和6年7月発売

曲名はオリジナルに類似しているが、内容は全く別物である。三節からなる歌詞は、円山公園の花景色、祇園界隈の舞妓の姿、嵯峨・御室の茶店の娘の姿を唄い、それぞれの節の最後を「わたしほんまに 好きどすえ」の詞章で締めくくっている。レーベルに作詞・作曲者の記載はないが、鳥取春陽の作か。<sup>(4)</sup>

#### vi. 『新祇園小唄』、唄・二三吉、ビクター52349、昭和7年8月発売

長田幹彦作詞、町田嘉章作曲。長田、二三吉、ビクターと、作曲は異なるもののオリジナルに極めて近いスタッフによる作品。春夏秋冬の四節からなる構成（レコードには春夏の二節のみ収録）はオリジナルと同じであるが、こちらはよりはっきりと舞妓の悲恋を唄っている。また、京の四季の描写も相変わらず鮮やかで、長田が他の同名・類似名異曲の作家とは、全く異なる次元の作詞家であることを見せている。

町田の作曲は全く新しいものだが、各節末はオリジナルの「祇園恋しや だらりの帯よ」の詞章・メロディーで締めくくり、なおかつ間奏にはオリジナルのメロディー一節分を、丸ごと使用している。これは名曲となったオリジナルにあやかるうという、ビクター文芸部の意図によるものだろうか。結果的に町田はオリジナルのリフォームを依頼されたような形であるが、自身の手によるメロディーは平板なもので、皮肉にも間奏と「祇園恋しや だらりの帯よ」の部分のみが印象に残る曲となっている。

レコードレーベルには何の記載もないが、この盤の発売から1ヶ月後に、新興キネマ作品『新祇園小唄』（監督・曾根純三／主演・森静子）が公開されていることから、この曲は映画主題歌であった可能性が考えられるが、現段階では不明である。

#### vii. 『祇園恋しや』、唄・市丸、ビクター52696、昭和8年6月発売

長田幹彦作詞。曲全体は、「夜桜に一」で始まる三味線伴奏の小唄仕立てだが、オリジナルの第一節がアンコとして、管弦楽伴奏で使われている。デビュー間もない市丸の名唱が生きた小品。オリジナルの『祇園小唄』は、新内を意識して作られた、東京人による東京生まれの曲であることは既に述べたが、<sup>(5)</sup>本曲はさらに全編江戸情緒に彩られている。三味線音楽が醸し出す日本的情緒には、本来地域性があるが当然である。しかしこの曲は、当時すでに東京の視点がレコード業界を代表し、

全国へ発信されていたことを物語っている。

viii. 『祇園ながし』、唄・幾松、タイヘイ4450、  
昭和9年4月

歌島花水作詞、宮本啓一作曲。曲名、歌詞、メロディーのいずれもオリジナルとは異なるが、「月も朧の円山あたり」という歌い出しや、前奏、間奏を含めて、全体的にどことなく似ているという、類似曲の標本のような作品である。

ix. 『新祇園小唄』、唄・藤本二三吉、コロムビア  
27824、昭和9年5月発売

南風原朝成作詞、佐々紅華作曲。昭和8年にビクターからコロムビアに移籍した二三吉が、オリジナルのメロディーで歌詞を変え唄った作品。コロムビアの『祇園小唄』としては、他に前述の i. と次に述べる x. があるが、i. はオリジナルの前に早々と消え去った感がある。また『祇園小唄』=二三吉のイメージが強いせいか、この盤は戦後もカップリングを変え、何度も再版された。それはSPレコードのみならず、EP、CDと時代と共にメディアを変え、現代に伝えられている。

本曲の、節末を「舞妓いとしや、だらりの帯よ」で締めくくる二節の歌詞は、京の風情や舞妓の心情を巧みに詠み込み、オリジナルに第五・六節として加えても違和感のない出来である。作詞の南風原朝成については不明であるが、長田幹彦の変名ではないだろうか。

x. 『新版祇園小唄』、唄・豆千代、コロムビア  
30242、昭和14年6月発売

長田幹彦作詞、佐々紅華作曲。『歌謡組曲・祇園双紙』という二枚組アルバムの第一曲として取められた。歌詞・曲共にオリジナルの春・夏と同一であるが、曲名の「新版」が示す通り、ここでは箏主体の荘重華麗なアレンジが施されている。

作曲の佐々紅華は、オリジナルを発表した直後

の昭和5年夏に、ビクターから古巣のコロムビアへ移籍した。しかし移籍後はこれといったヒット曲に恵まれず、昭和9年の「さくら音頭」における各社競作合戦に敗北を喫したのを機に、流行歌の第一線からの引退を決意した。そして、邦楽と洋楽の合奏研究に没頭し、新たな日本音楽の道を模索することとなる<sup>(6)</sup>。本曲のアレンジは、そうした佐々の研究成果の一端とも見受けられる。唄は二三吉から豆千代へと引き継がれ、本家の二三吉は裏面の『おぼろ柳』という小唄調の曲を唄っている。この世代交代は、オリジナル発売から約十年の間に流行歌が遂げた進化を物語っているようで、興味深い。しかし『祇園小唄』はやはり二三吉のもので、豆千代の起用は残念ながら支持を得られなかったように思われる。

昭和流行歌の幕開きとともに、レコード界を席卷した二三吉であるが、その発声はやはり純邦楽のものであった。したがってその歌唱力は、中山晋平のメロディーや初期の流行歌はこなしたものの、日進月歩の流行歌が要求する表現力に対応できなかった。このころ二三吉は、すでにコロムビアから大冊の端唄小唄のアルバムを発表しているが、自身の本来のポジションへ安住の地を見出したと見るべきであろう。

二枚組のもう一枚は、『祇園ブルース 唄・淡谷のり子／おはらめルンバ 唄・ミス・コロムビア』という、京都ものジャズソングである。

## 2. 戦時下の祇園小唄

『祇園小唄』は発表されて間もなく、井上愛子（後の四世井上八千代）による振付がなされ、京舞井上流のレパートリーに加えられた<sup>(7)</sup>。四世井上八千代監修『京舞井上流歌集』（八坂女紅場学園、1965）には、絶えたものも含めて289曲が収録されているが、『祇園小唄』はこれらの中で、どのようなポジションを得たのだろうか。それは次の戦時下のエピソードが、多くを物語っているように思われる。

中国大陸での戦況が好転せぬ昭和13年。当時の

井上流家元三世井上八千代は、傷病兵の苦勞を想い、慰問舞踊会の開催を京都師団に申し出た。そして病床にあった家元に代わり、高弟の松本佐多と井上愛子が代表となり、昭和13年8月27、28日東福寺の赤十字病院と深草の陸軍病院で「傷病兵慰安舞踊会」が催された。後に四世八千代は、その時の番組について次のように書いている。

番組は『京の四季』『春雨』『祇園小唄』『夏は蛩』『汐くみ』舞妓一同の『愛国行進曲』でした。富子、里千代、里春さんらが『祇園小唄』や『汐くみ』を舞いました。ダラリの帯の舞妓さん七人が、日の丸と日章旗をもって『愛国行進曲』を二回つづけて舞ったときは、白衣の兵隊さん達も大喜びで、最後には一緒に合唱されるさわぎでした。(京都新聞編集局編「兵隊さん慰問の舞」『京舞』、淡交社、1960年、135-138頁)

『愛国行進曲』は昭和12年9月に内閣情報局の一般公募で作られた国民歌で、翌年2月に各社競作の形で発売され、100万枚を越えるヒット曲となった。この年の都をどり「第七十一回 旭光遍輝」でも大切を飾り、好評を博している<sup>(8)</sup>。一般に井上流の舞は多くの歌舞伎舞踊と異なり、能から題材を採った「本行もの」に代表されるように、格調高いものとされている。しかし様々な階層を対象とした慰問舞踊会であるため、ここではとりわけ親しみやすい演目が集められている。その中央に『祇園小唄』が配置されたことは、この曲が井上流と大衆を繋ぐ重要な役割を、当時すでに担っていたことを示すと考えてよいだろう。この役割はその後も変わらず、むしろいよいよ大きくなったといえるのではないか。日常生活において、純邦楽との馴染みがより希薄となった今日、知名度の点で、『祇園小唄』が最も有名な曲になってしまったといえるだろう。

軍関係の慰問舞踊会は、その後も続けられたようだ。祇園甲部の芸舞妓18名で構成された、横山慰問舞踊吹奏楽団(代表、横山ふく)の慰問演奏

会番組(図1)には、全12曲の内の終わりから3曲目に『祇園小唄』が置かれている。昭和17年5月10日に舞鶴海軍病院で催されたこの慰問会は、『君が代行進曲』『愛馬進軍歌』『露営の歌』『軍艦行進曲』『護れ太平洋』等の吹奏楽演奏を除くと、舞に関しては前出の舞踊会で演じられた『京の四季』『春雨』『祇園小唄』『愛国行進曲』は共通している。京舞の慰問舞踊会の演目としてのパターンが確立されていたものと思われる。

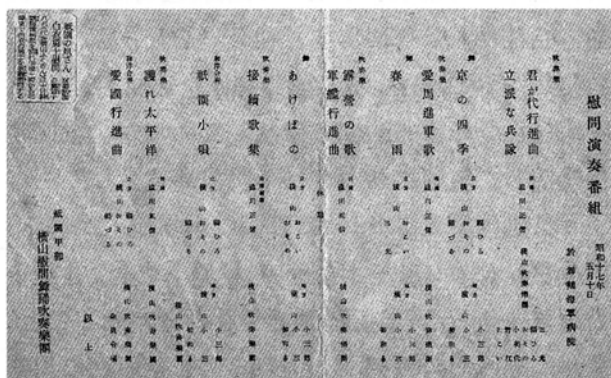


図1. 慰問演奏会番組 昭和17年5月10日

### 3. 書き換えられた歌詞

『祇園小唄』の歌詞は前記1-1の通りであるが、この内第四節の冬の部分が書き換えられた事実を、長田自身が書いている。

(前略) ところがその時分の通信局長ににらまれて、「もあい枕の川千鳥」というあの文句がいかにいうので役所によばれて新聞記者諸君立合いのうえうんとひちばられた。バカみたいな話である。

文句はすぐなおしたがもあい枕ではそう直せるものじゃない。とうとうそのままになって二三吉さんなんか平気でうたっていた。あの時代のお役人なんてひどいものだった。

「あなたは家庭で娘さんたちの前でこの唄を平気でうたうか」と二三度どなられた、「もあい枕」というのは女と二人で枕をならべて寝ている情景だとわろく推量したものだったらしい。おそろしい時代であった。立派

なヒゲのある人の方がずっとエロだったのである（以下略）。（長田幹彦『祇園小唄』の話『ぎをん 2号』、祇園甲部組合、発行年月記載なし、2頁、第1号は1959年1月発行）

通信局長からのクレームということは、ラジオ放送の台本検閲の際の逸話と思われる。放送では訂正したが、以後元のままで通したということだろうか。『祇園小唄』のラジオ放送については現在、昭和5年1月29日（BK・大阪放送局発）「映画劇 絵日傘」及び同年4月14日（FK・広島放送局発）「祇園小唄 唄・田辺艶子」の2件を、大阪朝日新聞の番組欄にて確認しているが、歌詞書き換えの事実等については不明である。

『日本国語大辞典』（第二版、小学館、2001年、1391頁）によると、「もやい【舩】」とは、「船をつなぎとめること。船と船をつなぎ合わせること。また、そのための綱。」とある。「もやい枕に川千鳥」とは、舩綱に千鳥が休んでいる、凍てつく夜更けの鴨川の情景を詠んだものであろう。一方同音の「もやい【催合・最合】」には「他の人と共同して、物事を行うこと。二人以上の人がいっしょに事を行うこと」との意がある。小唄『晴て雲間<sup>(9)</sup>』には「もやいまくらのかやのうち」という歌詞があるが、これは男女が蚊帳の中に一つ枕でいることを詠んだものである。したがって通信局長の反応も、あながち間違いではなかったわけだが、誤解された長田こそお気の毒というべきか。

平成14年2月22日の京都新聞夕刊が、『祇園小唄』の長田の自筆草稿が、祇園のお茶屋に保存されていたことを報じている。この自筆草稿は、<sup>(10)</sup>「もやい枕に川千鳥」の部分「傘に浮名の川千鳥」となっており、長田の証言と一致するのは興味深い。

この件とは別に、第四節冒頭の「雪はしと／＼丸窓に」の部分、映画『祇園小唄 絵日傘 第一話 舞ひの袖』に字幕で流れる歌詞や、映画公開以前に新聞発表された歌詞では、<sup>(11)</sup>「雪はしと／＼窓の戸に」となっている。新聞記事は映画について報じたものであり、マキノサイドへは、「窓の

戸」で伝えられたのだろうか。これら以外には、レコード添付の歌詞カードをはじめ、管見に入っただものはほとんど「丸窓に」である。しかし戦後発売された、長田幹彦『祇園小唄』（千代田書院、1953）に挟み込まれた歌詞の一枚刷は、「窓の戸に」となっている。やはり二通りの底本が存在するのだろうか。

#### 4. 戦後の再版

オリジナルの『祇園小唄』の発売元日本ビクターは、戦災により社屋、工場のほとんどを失った。壊滅状態からの復興は昭和20年12月、社名を「日本ビクター株式会社」と改めてのスタートである。幸いにも原料倉庫やレコード原盤が残ったので、昭和21年10月よりコロムビアの設備を借りて、既発売盤の再プレス生産が始まった。戦後吹込み盤として初めての<sup>(12)</sup>新譜が出のは、昭和22年3月である。

戦後のビクターのレコード番号はV-40001から始まるが、その95番目に『祇園小唄』が取りあげられた。同じ時期の大ヒット曲『浪花小唄』とのカップリングである。

『浪花小唄／祇園小唄』、唄・二村定一／藤本二三吉、V-40095、昭和23年5月発売

これは片面に収められたため、春・夏の二番のみである。その後春夏秋冬全てを求める声が高かったのだろうか。7年後、全曲が再版された。

『祇園小唄』、唄・藤本二三吉、V-41385、昭和30年5月発売。

戦後のSPレコード時代に、ビクターから再版された戦前流行歌の数は、他社に比べ少ない。その中であって、『祇園小唄』が二度再版されていることは、この曲が売れる曲であったことをうかがわせる。その後EP、LP、CDと時代と共にメディアを変え、度々復刻されている。その全貌を

把握していないが、春・夏の二番のみの復刻が多いように思われる。

## 5. むすび

映画主題歌『祇園小唄』が発表されて以来、数多くの京都を題材とした唄が発表された。その数は定かではないが、昭和のSPレコードの時代に限っても、200曲を下らないのではないだろうか。それらの中には当然ヒット曲もあったと思われるが、『祇園小唄』の知名度には遠く及ばないであろう。

『祇園小唄』の生みの親である長田幹彦は、その後も多くの「祇園もの」の作詞を担当した。それらは佳作揃いで、中には『祇園小唄』を上回ると思える作もあるが、ヒットに至ったものはなかったのではないだろうか。流行するということ、そしてそれが記憶の再生産に結びつくとはどういうことか、改めて考えさせられるところである。

多くの名所旧跡を持つ歴史都市京都へは、毎年全国各地から多くの観光客が訪れる。彼らが胸に抱くのは、自分達の文化とは違うものを求める全国の欲求と、それに応える異文化としての自文化を売り込む京都が、互いに補強しあうことによって作り上げた京都像である。祇園は京都にある花街のひとつであるが、この京都像の中核に位置しているといっても過言ではない。地方小唄（ご当地ソング）の全盛期でありながら、まだ京都の唄が生まれていなかった昭和初期に、『祇園小唄』は映画主題歌として登場した。人々はこの唄に京都のイメージソングとしての資質を見出し、その結果『祇園小唄』はたちまちの内に映画を離れ、京都の唄として育てられた。そして発表から75年、もはや古典の領域へ差し掛かったといえるのではないだろうか。

## 注

- (1) 拙稿「映画主題歌「祇園小唄」考」『アート・リサーチ Vol.3』（立命館大学アート・リサーチセンター、2003）157-164頁

- (2) 『浪花小唄』、時雨音羽作詞、佐々紅華作曲、唄・二村定一／葎町二三吉、ビクター50793、1929年7月発売
- (3) 仲辻秀綱氏のご教示による。
- (4) 仲辻秀綱氏のご教示による。
- (5) 拙稿、前掲書、160頁
- (6) 清島利典『日本ミュージカル事始め』（刊行社、1982）298頁
- (7) 拙稿、前掲書、162頁
- (8) 拙稿「都をどり関連のレコード」科学研究費補助金研究成果報告書『無形文化財と記録・保存— 都をどりの一六ミリ映画を題材として —』（立命館大学、2001年6月20日）177-178頁
- (9) 中内、田村篇「小唄、うた澤、端うた全集」『日本音曲全集』（第4巻、日本音曲全集刊行会、1927年）13頁
- (10) 「祇園小唄 長田幹彦直筆の歌詞草稿 お茶屋にあった」『京都新聞 夕刊』（2002年2月22日）
- (11) 「絵日傘の小唄 佐々紅華作曲」『京都日出新聞』（1929年12月28日）
- (12) 岡田則夫「続・蒐集奇談26」『レコード・コレクターズ』（2月号、ミュージック・マガジン社1993）91頁